

派遣者番号	管R2K10	氏名	榎本 和哉
研究主題 —副主題—	教員の「家庭や地域と連携・協働する力」を高める一方策 —ワークショップ型校内研修の実践を通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	伊東 哲
所属	東久留米市立神宝小学校	所属長	大野 寿久

キーワード：地域連携 外部との連携・折衝力 連携マインド 省察力 校内研修

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

文部科学省は、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校運営協議会制度と地域学校協働活動の一体的推進による学校と地域の連携・協働体制の構築を推進している。各学校においては、制度導入に伴う地域人材の確保や校内体制の構築だけでなく、教員自らが「家庭や地域と連携・協働する力」を高めていく必要がある。

本研究では、教員が「家庭や地域と連携・協働する力」を高めていくための一方策として、ワークショップ型校内研修を提案する。本研究が、学校と家庭や地域との連携・協働に向けた校内研修及び学校づくりの一助となることを目的とする。

## 2 研究の方法

### (1) 調査研究

- ◆学校と家庭や地域との連携・協働に向けた教員の育成に関する課題整理
- ◆教員の「家庭や地域と連携・協働する力」に関する先行研究の調査・分析
- ◆校内研修の在り方に関する先行研究の調査・分析

調査研究では、中央教育審議会における「学校と家庭や地域との連携」についての答申から、教員の育成に関する課題について考察した。次に、先行研究を基に教員の「家庭や地域と連携・協働する力」について調査・分析した。そして、校内研修の在り方について考察し、教員の「家庭や地域と連携・協働する力」の向上とワークショップ型研修の親和性を見いだした。

### (2) 実践研究

- ◆事前調査の分析
- ◆ワークショップ型校内研修の実践
- ◆事後調査の分析

実践研究は、都内公立A小学校の教員 25 名を対象にワークショップ型校内研修を実施した。事前・事後調査の結果を比較し、教員の「家庭や地域と連携・協働する力」の高まりを検証した。

## 3 研究の結果

### (1) 教員の「家庭や地域と連携・協働する力」に関する先行研究の調査・分析

「東京都教員人材育成基本方針〔一部改訂版〕」（平成 27 年、東京都教育委員会）によると、「外部との連携・折衝力」を、「保護者、地域、外部機関と連携・協働する力」と定義しており、本研究の「家庭や地域と連携・協働する力」と同義として捉えた。教員の「家庭や地域と連携・協働する力」の構成については、高橋・杉田・山崎（2018）「地域との連携・協働を担う教員に求められる資質・能力を構成する概念に関する一考察」で明らかにされている（図1）。

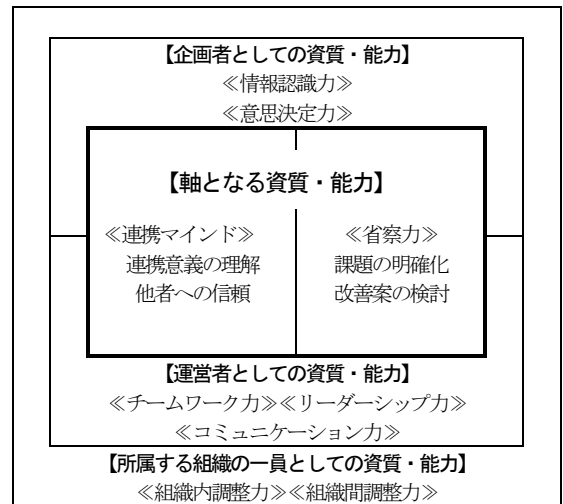


図1 教員の「家庭や地域と連携・協働する力」の構造（参考文献（高橋ら（2018））より筆者作成）

その中で、学校と地域の連携に向け、教員が備えるべき「軸となる資質・能力」は、「連携マインド」と「省察力」で構成すると言及している。

「連携マインド」は、地域連携に関する意義の理解や組織内外の多様な人々への信頼等から構成される。すなわち、意識や情意面の資質・能力であると解釈する。

また、「省察力」は、課題を明確にすることができる力や改善案を検討することができる力等から構成される。つまり、自身の教育実践を振り返る力のことである。

実践研究においては、教員の「家庭や地域と連携・協働する力」を構成する資質・能力のうち、

特に「連携マインド」と「省察力」に焦点を当て、校内研修を実施し、検証した。

## (2) ワークショップ型校内研修の実践

各学校においては、教員育成の際、教員の計画的かつ効果的な資質・能力の向上を図るため、各自治体の教員育成指標を活用して、研修等に取り組んでいくことが期待されている。

そこで、都内公立A小学校において、「東京都公立学校の校長・副校長及び教員としての資質の向上に関する指標」（平成29年、東京都教育委員会）

（以下、「指標」と表記）を活用したワークショップ型校内研修を実施した。研修では、筆者がファシリテーターとなり、以下の要領で、教員の「家庭や地域と連携・協働する力」の育成を図った。

テーマ：「学校と家庭や地域との連携・協働」について考える

日時：令和2年11月24日 14:30~15:30

場所：都内公立A小学校

参加者：教職員25名

目的：

①「学校と家庭や地域の連携・協働」が求められる背景について考える。

②「指標」を基に、「学校と家庭や地域の連携・協働」に向けた教員の目指す具体的な姿や行動について考える。

内容：

①趣旨説明「なぜ学校と地域との連携・協働が求められるのか」

②ワークショップ『外部との連携・折衝力』について考えよう！

【個人】⇒【グループ】⇒【全体】

③振り返り

ワークショップは、「個人」、「グループ」、「全体」の三段階で設計した。

「個人」の段階では、参加者たちが「指標」を読み、それに関する教育実践を省察しながら、付箋に記入した。

「グループ」の段階では、異なる経験年数でグループを構成し、各グループでKJ法を用いて考えを整理した。

「全体」の段階では、グループで作成した模造紙を提示しながら発表し、学びを共有した。また、総括として副校長から、過去にどのようにして学校と家庭や地域との連携・協働を図っていったか経験を語ってもらった。

ワークショップ型校内研修の効果を検証するために参加者の発言などを記録し、「連携マインド」や「省察力」に関することに重点を置いて考察した。事後インタビューでは、参加者から学校

と家庭や地域との連携・協働に関して、「挑戦してみたい」、「当事者意識をもつことが大切」などの前向きな考えが抽出された。

このことから、本研修により教員の「連携マインド」が高まったと考察することができた。また、インタビュー回答の中に「自分で気付かないところがあった」、「今までは受け身の姿勢だった」などといった、教員が自己の実践を振り返る内容もあったことから、「省察力」の高まりを見取ることができた。

## 4 研究の考察

ワークショップ型校内研修の実践結果から、本研究では、教員の「連携マインド」や「省察力」の高まりを効果として見取ることができた。

その要因として、異なる経験年数の教員で構成したグループごとに教育実践を省察したことにより、学校と家庭や地域との連携・協働についての話合いや振り返りが充実したこと、長年の経験を語る管理職の参加があったことなどが考えられる。

より充実した校内研修にするためには、管理職の力も借り、全教職員で研修をつくり、皆で学び続ける雰囲気づくりが重要である。各学校においては、学校と家庭や地域との連携・協働に向けた教員の姿勢や意識を学校組織全体で高めていけるよう、様々な形の研修を企画し、運営していく必要がある。

## 5 今後の展望

本研究における研修の対象者は教員のみであった。学校と家庭や地域との連携・協働を実現させていくためには、教員だけでなく、事務職員、保護者、地域の方などを含めた研修が必要である。

今後は、多様な人材をと連携した複数回に渡る研修について追究していくとともに、複数の学校で同研修を実施して結果を比較するなど、その効果について多面的に検証していく必要がある。

なお、本研究の成果の活用法については、本研究のワークショップ型校内研修を、学校と家庭や地域との連携・協働に向けた研修の一つとして提案する。その際に、学校と家庭や地域との連携・協働に向けた学校づくりや、ワークショップ型校内研修のファシリテーターのための参考資料として活用できると考える。